



3 編、4 編は詩人としてダビデが登場します。神の霊がサウルを襲うたびに、ダビデが傍らで豎琴を奏すると、サウルは心が安まって気分が良くなり、悪霊は彼を離れた(サム上 16:23)とあるように、ダビデは豎琴の名手です。ダビデの名前が付けられている詩編は 71 編もありますが、ダビデの詩であるかどうかは不明でも、詩人ダビデの魂に寄せて、詩編を編んだと考えられるでしょう。ダビデは神殿で歌う詠唱者と、豎琴、琴、太鼓、鈴、シンバル、ラッパの奏者を任命したとありますから、音楽を愛した人物と言えます。

出エジプトの時、モーセとイスラエルの民は歌を歌って主を賛美し、モーセの姉ミリアムが小太鼓を手にとって、歌い、踊った(出 15:1)のが、最初の演奏の記録です。主イエスも弟子たちと賛美の歌を歌ってからオリーブ山へ向かっています。Today's English Version では、それぞれの詩編に題名があり、3 編は「助けを求める朝の祈り」、4 編は「助けを求める晩の祈り」です。

3 編はダビデが三男アブサロムの謀反を知り、都から脱出した時の心境を歌っています。

主よ、わたしを苦しめる者は／どこまで増えるのでしょうか。多くの者がわたしに立ち向かい／多くの者がわたしに言います／「彼に神の救いなどあるものか」と。〔セラ 主よ、それでも／あなたはわたしの盾、わたしの栄え／わたしの頭を高くあげてくださる方。／主に向かって声をあげれば／聖なる山から答えてくださいます。〔セラ 身を横たえて眠り／わたしはまた、目覚めます。主が支えていてくださいます。／いかに多くの民に包囲されても／決して恐れませんが。(3:2)と、民が分断され、解決の道が見えない苦難から解き放って下さいと祈り、主のみが助け手であることを信じて、目覚めていると歌う詩です。最後に 救いは主のもとにあります。あなたの祝福が／あなたの民の上にありますように。〔セラ(3:9) と、民に祝福を祈っています。「セラ」は演奏上の用語であり、意味は不明とのことですが、そこで息継ぎをすると、とても朗読しやすかったので、休符の印と理解して、読んでいます。

4 編は、「指揮者によって、伴奏付き」とされている賛歌です。ということは多数の歌手が何らかの曲にのせて歌ったということです。ここでもダビデは 呼び求めるわたしに答えてください／わたしの正しさを認めてくださる神よ。苦難から解き放ってください／憐れんで、祈りを聞いてください(4:2)と、苦難から解き放ってくださるように、主の憐れみによる助けを求めています。横たわるときも自らの心と語り／そして沈黙に入れ。〔セラ / 平和のうちに身を横たえ、わたしは眠ります。主よ、あなただけが、確かに／わたしをここに住まわせてくださるのです。(4:9) ダビデ自分の心を静かに確かめながら、なお神を信頼し、主への捧げものは、自らの全幅の信頼であると信じ、夜は平和に眠る、と告白しています。昼も夜も神の御守りを確信しています。

「讚美歌21」では 3、4 編の曲はありませんが、ジュネーブ詩編歌にはあります。

参照 https://www.youtube.com/watch?v=jsz_WvUakdA&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=3

参照 <https://www.youtube.com/watch?v=iIbSMonqLBU&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=4>



各節に、関連する讚美歌は 6 曲あり、いずれも「神のもとに行って眠る」というダビデの積極的な信仰の姿勢を歌っています。213「み神をたたえよ」はイギリスのトマス・ケン(Thomas Ken, 1637-1711)の詩に、イギリスのトマス・タリス(Thomas Tallis, 1505?-1585・左)の曲を付けた讚美歌です。古風で、素朴な、易しい曲想です。輪唱として、楽しく歌える讚美歌です。

参照 https://play.hymnswithoutwords.com/glory-thee-god-night-tallis-canon/#Recording_Download